『花色紙襲詞』について　―累物としての位置付け―

浅野祥子

『花色紙襲詞』は八文字其笑・瑞笑の作で、宝暦七年（一七五七）正月の刊記がある。

『花色紙襲詞』は、すでに指摘されているように「『天智天皇苅穂庵』（宝暦四年十二月十五日、豊竹座）とそれを御家騒動劇に改作した『けいせい苅穂庵』（同五年二月二日、京染松座上演）による。（1）」八文字屋本である。そのうち『けいせい苅穂庵』については、『歌舞伎年表』第三巻によってあらましの内容は知られるが、本作は御家騒動物でありながら、その中に累物としての様々な要素をも備えていることに気づかされるのである。物語の荒筋を追いながらその特徴を調べていきたい。

一、『花色紙襲詞』の梗概

近江国志賀郡の大領、久方大夫の屋敷では辛崎大明神の神事が行われている。柴屋町の傾城、槙の葉にうちこんでいる嫡男雲井之丞はなかなか姿を見せないが、やっと現れ座に付く。そこで、恒例の家の重宝、坂上是則の色紙改めがあり、色紙が箱の中にないことが発覚する。そこへ、色紙を金子のかたに預かっているので金子をいただきたいと、浪人が現れる。大殿は金子を渡して色紙を受け取る。浪人が帰ろうとするところへ、執権逢坂関之進代理の女房難波江が声をかける。家老田子浦右衛門と大江山幾左衛門が、初対面のはずの浪人の苗字を聞かないうちに知っていたのはなぜか、という疑いである。家老二人は色紙紛失を雲井之丞の罪として雲井之丞を追放し、家を横領しようとしたのである。浪人が持ってきた色紙も偽物だとわかった。難波江が浪人を詮議しようとしたところ、幾左衛門が浪人を殺して詮議の根を断ってしまった。夜、雲井之丞の寝所へ継母の浅茅生御前がしのんで来て、恋心をかたる。浅茅生御前は自分の生んだ白妙姫に婿を取って家を継がせたいと望んでおり、邪魔な雲井之丞に邪恋をいいかければ嫌がって家を出るだろうという計算をしたのである。浅茅生御前は望みをかなえなければ自害をすると脅し、誤って自分で死んでしまう。浅茅生御前殺しの嫌疑がかかるのを恐れて、雲井之丞は出奔する。ここまでが一之巻である。

一之巻で注目されるのは、辛崎大明神の雇われ神子かし

はの登場である。この女性の容貌は、「うまれつきふつゝかに顔にはあさ黒く。にぎり出したるやうなるに。瓢箪くゝりたるやうなる出じりわに足ゑしかり股」とあるように、「神代もきかぬ立居の見ぐるしさ」という有様である。このかしはの「醜貌」はなみのものではない。累物であるための一番大切な要件である、「醜貌」を備えているといっても過言ではないのであって、三之巻に再び登場し活躍する伏線なのであった。

二之巻。雲井之丞は、以前久しく召し使っていた草履取りの鹿蔵という者が、荷い売りの小間物屋になっているのを頼って行く、荷にしのばせてもらって廓へ行き、槙の葉に真情を伝えた。雲井之丞は代官所からも継母殺しの疑いで詮議が回っており、代官所の役人山鳥尾左衛門に危く発見されそうになる。廓の花車とそこに来合わせた槙の葉の兄で相撲取りの住江岸右衛門のはたらきで難を逃れて、雲井之丞は鹿蔵と住江岸右衛門を供に衣川村を心あてに落ち延びていく。ここで注目されるのは「衣川村」というキーワードであろう。舞台が衣川村に移ってゆくのであり、そこで「累」の物語が展開されることになるのである。

そして、住江岸右衛門が相撲取りであるのは、すでに指摘されている(2)『けいせい藤戸源氏』(享保十八年・京、八千代座)(『歌舞伎年表』第二巻)に「力士」が登場するのに暗示を得たかと思われる。

改めて三之巻の内容を見てゆくと、田子浦右衛門と大江山幾左衛門は家中の者を味方につけ、大領久方大夫を刺し殺してしまう。浦右衛門は盗みおいた真の色紙を、預けおいた志賀の神主さざなみよせ太夫より取り寄せ、跡目相続の参内をしようと画策する。逢坂関之進が女房難波江は、白妙姫を連れて屋敷を逃れ出る。

かしはの登場は、三之巻第二「人はいさ心もしらず夫婦のうたがひ」からである。そのときは、「神主松大夫相はて。娘かしは廿九歳。一たん聟を取たれ共。不縁にてかへりわすれがたみにお千木といふ娘。十一才になりけるが」という状況であるが、そこに神主がいなくては困るであろうと世話する人があり、小間物売りの鹿蔵の紹介で住江岸右衛門改め松右衛門を婿に取ることとなる。松右衛門は主人雲井之丞をかくまうために結婚をするので、女房の不器量は少しも気にしないが、一方かしはは「こちらに大望ある故とはしらず。かしははうれしくふごじりをすぼめ。わに足をもぢらせ。田舎づくりひろびたい。所まだらに雪はふりけるおしろいのけはい下手に。みがく程赤みの出る顔は。やす赤銅のはげてゆくに似たれ共。おとこのはかりことにて。そちにつれそふわが身は仕合ものじや。世界ひろ

しといへども。そなたのやうなうつくしい髪はないといへば。是も馬髪のたけみじかきを。くびすじへさげてゆひたてるに。半日づゝかゝり平もとゆひひんとそらせ。御所の五郎丸が馬から落た様なあたまに。つや油つよくぬりまわせば。顔へながれてみつちやにとゞこほり。雛まつりの行燈の皿には。重宝な名所のある顔と。村中がそしれば。雛様のやうに顔がつやひかる事と悦び。品をやつてふたつかゞみはなさぬは。いづれわが身をふきりやうとおもひてはくらされぬはづと。あはれにも見へけり」とあるように、「醜貌」にもかかわらず、この結婚を喜ぶ、その様は「あはれ」なのである。松右衛門は、雲井之丞を社に住まわせ、神へ供え物と称して御膳を運んでいる。

また、槙の葉は雲井之丞のことを案じ暮らしていたが、兄岸右衛門（松右衛門）より息災との便りをもらい、うれしさに廓を抜け出して遇いにきたところ、計らずも雲井之丞と遇うことができた。

雲井之丞は社の内、神前に白木の箱があるのを開けてみたところ、家に伝わる坂上是則の色紙だった。思いがけず手に入った宝物と、槙の葉のことについて鹿蔵と松右衛門と相談しようと槙の葉を社に隠し、出てゆく。

ところが、留守に女房かしははお社へ夕御膳をあげようと行ったところ、二十二、三才の当世風の女性がいるのを発見してしまった。かしはは夫の隠し女だと誤解し怒るが、槙の葉は弁解すると雲井之丞のことを言わねばならないので、黙っている。いよいよ怒ったかしはは槙の葉を社に押し込め、家へ戻ろうとしたところで、高宮に住む相撲仲間に相談して帰ってきた夫松右衛門と出会う。「よふもいま迄わしをつむぎたいほどつむぎやつたのう。そなたのもちはこびして信仰めさるゝ。御神躰戸びらをひらきとつくりとおがみ。外へ出られぬ様に戸びらにおもしをおいて来た。さあこれまでわしをだましすかして。たわけにめされたいひわけに。あのやしろの内なるわた持の神躰。そのわきざしでころして仕まや。いやといやれば庄屋殿へことはり。そなたの仕様がよいかわるいか。さばき所でさばかして見せう」と怒ってわめくかしはは、「いかりの眼うらみのいきざし。うまれ付たるふきりやうに。しんゐのほのほおもてにあらはれ。」、この様子に松右衛門は雲井之丞を見られたと思い、「さたなしにしてくれまいか」と頼んで

も、激昂しているかしはは聞き入れない。庄屋へ駆け出そうとするかしはを、松右衛門は刺し殺す。かしはは、まきのはと結婚するために夫が自分を殺すのだと信じ、「わかき女をやしろにかくし。わが身をだましあまつさへ。その女にそはんため。ようもむごう刃にかけるな。此一念此世にとゞまり。その方はおろか社にかくせしおんなめ。安穏におくべきか。エゝ口おしやむねんやな。」という台詞を残して息絶えたが、死んだ死骸がむくむくと立って「うらめしいなあとたちずくみに」なるという怪異を示す。松右衛門はそれに「わきざしのさやにて。清水につきこみ水ぎはの石を帯にくゝり付。まつさかさまにふかみへいるれば。底のみくずとなりにける」という有様。かしはは二度と浮かび上がらないように石を括り付けられて水底に沈められる。かしはの悋気はともかく、主君のためとはいえ松右衛門のこのような残酷な殺しは、累物としての特徴をよく表しているように思われる。

四之巻。田子浦右衛門は志賀の主となっていたが、宝物の色紙を持って跡目相続の参内を済ませていない。大江山幾左衛門を使いとして辛崎の神主に預けておいた色紙を取り戻そうとした。辛崎の神主は越知川村の社内へしまっておくように、宮もりにたのんでおいたが、色紙は紛失していた。久方家の執権逢坂関之進は、白妙姫の婚礼の相談に、相手方の美濃の門田稲葉之介の所に行っていたが、家の大事を聞いて急いで戻ってきた。途中で白妙姫を守る女房難波江に遇い、姫を門田稲葉之介に預けるよう指図をする。

関之進が江州城戸にしるべのあるのをたよりに道を行く時、手綱川の三日川原に着いたが、ここで怪異が起こる。夜の雨の中、女性の声で自分を殺した夫に対面するために娘を連れてきたが、さかさまな姿なので川を渡れない、船で渡してほしいという声が聞こえる。関之進は急ぎの旅であるからと断るが、船を出してみると十歳余りの小娘が乗っており、火の玉が付き添っていた。かしはを殺した後、松右衛門は夜のうちに主人の供をして立ち退いたので、かしはが残した十一才の女の子は、一人捨て置かれてしまったのだが、その子にかしはの亡霊が取り憑いて連れてきたのである。足を空に、手で歩む姿の幽霊が近世に幽霊の姿として広く知られていたことは、服部幸雄氏が「さかさまの幽霊」(3)で詳しく論じられているが、このさかさまなる姿のかしはが火の玉ともなり娘は岸に着いて礼をいう。

関之進が岸に着いてから後をつけていくと、亡霊が訪ねた家は雲井之丞たちが隠れる隠れ家だった。そして、「一おしおせば錠まへ湯とな」る勢いでまきのはに襲いかかるかしはの死霊を、人々はいったんは千手陀羅尼などで撃退する。ちょうど城戸村に逗留中の万水和尚の教化を願い、死霊成仏の道を計ろうということになる。

五之巻。雲井之丞はその後、家宝の色紙を手に入れ、参内も済んで晴れて志賀へ入部した。御家騒動も結着し、めでたいその場へ家鳴がして天井からまつさかさまに現れ、槙の葉めがけて火炎を吹きかけたのが、かしはの死霊であった。鎌倉から来られて村に逗留していた名僧万水和尚が、ちょうどお祝いを述べに居合わせ、死霊に高らかに十念を授けたところ、かしはの霊は成仏得脱を遂げ、菩薩となって雲に乗って消え失せたという。

右が『花色紙襲詞』のあらましであるが、御家騒動物の中に、従来の累物の作品、たとえば『死霊解脱物語聞書』、『新著聞集』あるいは歌舞伎作品などを巧みに取り込んで作品化したところは評価されてよい。すなわち、この浮世草子が成立した宝暦七年頃には、累物が頻繁に上演・出版される時期にさしかかっており、この作品もそういった風潮の一環として、書かれたと思われる。宝暦五年（一七五五）には中村座で『信太長者柱』が、また名古屋大須で『下総国累譜』が上演され、また、宝暦六年（一七五六）には森田座で『珍敷江南橘』が初演された。宝暦七年には京の染松座で『国両累文談』が初演されている。累物が次第に文芸の中で一つの流行となっていく過程で、累や与右衛門という登場人物を出さなくても、累物のエッセンスを取り入れた作品が成立したことを、この『花色紙襲詞』は示しているからである。つまり、この浮世草子は累物の系譜に属する作品とみなしてよいと思うのである。そして『花色紙襲詞』は逆にいうと、何が、どんな条件が累物であるかということを考えるヒントになると思うが、累物の条件とは何か、後続の作品を含めて次に記しておきたい。

二、累物の特徴

①累が醜いこと

『死霊解脱物語聞書』によると、累は「顔かたち類ひなき悪女にして剰へ心ばへまでも。かだましきゑせもの」である累に厭きはて、殺したのである。

その醜さは具体的には書かれていない。助の成仏のところにある、「めつかいてつかいちんば」という不具の描写のみである。正徳二年本(4)に付されている挿絵では、左右の眼の大きさが異なるように描かれているが、これは先天的な要素とされている。

これが生来のものであるか、後天的なものであるかは、後世の作品では様々である。『聞書』ではもちろん先天的な要素としている。しかし、『法懸松成田利剣』（5）（文政六年―一八二三―初演）の一幕である『色彩間刈豆』では、与右衛門が累の父の髑髏を砕いた途端に累は顔を押さえ、醜く変わることになっている。父が左目を鎌で刺されて死亡した、それと同じような疵が、累の顔にもありありと現れるのである。また卒塔婆を砕いた途端に足も悪くなる。

舞台上で、観客の眼前で美女が醜女に変身するということは、舞台効果としては抜群であり、生まれつきは美女であったが、やがて因果によって醜女になるという図式が定着していく。服部幸雄氏(6)は「累が鏡によって確認した自身の変貌こそは、この女が他ならぬ『累』になったことの証しであり、彼女が鏡の中に見たものは因果への恐怖である」と述べられている。

累が生まれつき醜かったという設定を捨てたことが、江戸の文化に取り入れられる大きな要素だったと服部幸雄氏は述べられる。そして、享保十六年（一七三一）に初演され、累狂言の嚆矢とされている『大角力藤戸源氏』で既に、「確実ではないが、この時すでに前半の累は醜女ではなくなっていたのではないかと想像される」とされる。

②累の性格が悪い（嫉妬深い）こと

『死霊解脱物語聞書』には、累は「顔かたち類ひなき悪女にして剰へ心ばへまでも。かだましきゑせもの」とあり、心の悪い女としてある。これだけでは性格の中でも特に嫉妬心が強いかどうかはわからない。殺されて二十六年後に菊に取り憑いた折に累は与右衛門に「すぐに取り殺そうと思ったが地獄の呵責の隙がないので直接来られなかった。しかし私の怨念がお前のかわいいと思う妻六人を取り殺したのだ。そのうえ私の妄念が虫となってお前の田畑を食い荒らすので他人の田畑よりも不作となっているのだ」と述べている。祟りの目的はあくまでも自分を殺した与右衛門を殺すことであるが、その怨念の副産物として妻六人を殺し、田畑も不作にしたと述べているのである。

しかし後妻六人を取り殺したということはやはり強烈な印象を与えるせいか、後代の累物の作品では累は嫉妬深い女とされることが多い。

『花色紙襲詞』のかしはは「心はすなほにして」と書いてある。『花色紙襲詞』の岸右衛門（松右衛門）は忠義のための結婚であるからかしはの器量は気にしていない。ところが巻之三では間違いから起こる嫉妬で、かしはの心も悪くなることが描かれており、殺害の動機となる。

安永七年（一七七八）閏七月、中村座で初演された『伊達

競阿国戯場』（7）では、絹川谷蔵（与右衛門と改名）は相撲取りであり、これには『花色紙襲詞』の影響があろうが、自分が殺した高尾の妹、累に恋慕されて結婚する。累は高尾の祟りにより顔が醜く変わり、足も悪くなるが、夫婦仲は睦まじい。夫の金策のために廓に身を売ろうとまでする。しかし、累は自分の器量が変わったことに気が付き、また主君足利頼兼の許嫁、薗生の前を与右衛門の愛人と誤解したところから、家の重宝稲妻の名鏡を川へ打ち込み、薗生の前に危害を加えようとする。与右衛門は累を殺す。文政二年（一八一九）の『累辞絹川堤』（8）では、浮田家の忠臣与右衛門の妻かさねは、主君左金吾の愛人高尾太夫（民と改名）を連れて下総へ行くが、夫与右衛門と民との仲を疑って民におろし薬を飲ませようとし、また木太刀で打ちかかったところから、与右衛門に殺される。

顔が醜くなると同時に心も嫉妬深くなるという趣向の作品が多いのが一つの傾向としてあげられる。

早川雅水氏（9）服部幸雄氏は累の話を江戸の文化が取り入れるためにもう一つ必要だったことが、累の「嫉妬する女」としての性格を強調したことだとされている。嫉妬は、「女形の芸の類型として有効」（服部氏）だったのである。

早川氏は「『新著聞集』（寛延二年）くだっては『近世奇跡考』などに実説と伝えるところを見ても、又、累物としては最古のものと思われる『死霊解脱物語聞書』（元禄三年版）を見ても、累の悲劇は、単に、あまりの醜さ故に夫の手で殺害せられたという点に要約されてしまい、『嫉妬の女』としての性格は希薄である。しかしこれが歌舞伎の世界に入り、そこで代表的なヒロインにまで成長しえたのは、実に、彼女が『嫉妬の女』としての性格を賦与されたからにほかならない」と述べておられる。

富田鉄之助氏は「怨念の展開―累から岩へ（10）」で、嫉妬の業を現す累のドラマは、特に「身売り」系累狂言で結実していると述べられる。「身売り」系狂言とは、『伊達競阿国戯場』などの狂言を指す。

③水辺で殺されること

累は『死霊解脱物語聞書』では刈り豆を背負わされた状態で川へつき込まれ、水と砂で責め殺された。それ以来累物の殺しは水辺で行われるというのが定法である。

『伊達競阿国戯場』でも殺害現場は鬼怒川の土手である。列挙するならば、『累辞絹川堤』でも、きぬ川づつみで殺害が行われる。文化六年（一八〇九）森田座で上演された鶴屋南北作の『阿国御前化粧鏡』では累は木津川土手で殺される。文化九年（一七一二）南北によって執筆され、なぜか上演されなかった『解脱衣楓累』でも、累は絹川堤で殺される。文

政六年（一八二三）にやはり森田座で上演された鶴屋南北作の『法懸松成田利剣』でも累は川辺で殺される。この場面が有名な「色彩間苅豆」である。書置きを置いて出奔した与右衛門を追って、振袖のかさねが追いついたのは、木下川堤だった。二人が心中の覚悟を語り合うところへ流れ着いたのは、鎌が刺さったままのかさねの父、助の髑髏だった。その鎌を与右衛門が引き抜いたとき、かさねの美しい顔がたちまち悪女の相に変じる。水流は、髑髏を漂わせ近付けるという機能を果たすと同時に、それによって過去の殺人の記憶を与右衛門のうちに蘇らせ、かつ因果をかさねの身の上に表すという役割を果たす。水の流れが過去を運んできたのであり、水辺は時空を越える場所となるのである。「色彩間苅豆」の水辺での殺しは、累物の伝統を踏まえつつ、水辺という条件の本質を生かしたものだと言えよう。

④夫に殺されること

累の恨みが深いことを納得させるのが、累が夫に殺されたということである。

南北の『解脱衣楓累』では、空月によって殺された（二人は心中しようとするのだが、お吉が死んだ後に空月は心変わりをした）お吉は、首となっても言葉を話す。空月は首を持ち歩くが、お吉の妹かさねに懸想し、迫るとき、お吉の怨念はかさねに乗り移って怪異を起こす。最後、かさねの弟金五郎によって空月は討たれるのである。

高野匡子氏(11)は出世と色欲に生きた人間として、この空月と『法懸松成田利剣』の与右衛門の共通点を指摘される。与右衛門は、累が醜くなったのを見て愛想を尽かし、また自分が殺した助の娘であると知ると累が自分を敵とつけねらう可能性があるため、累を殺すのである。

妻（恋人）を殺す夫の動機を考える場合、忠義や義理のためやむをえずか、非義非道の人間であるかの二つの場合があるようだ。『聞書』の累の場合は後者であるが、累物の中でも身売り系では、前者であるようである。

『伊達競阿国戯場』（歌舞伎）では、主君頼兼の許嫁の薗生の前をかくまう夫与右衛門（絹川谷蔵）を累が誤解して、姫を夫の愛人だと思い込んで殺そうとし、またお家の重宝「稲妻の名鏡」を累が川に打ち込んだため、与右衛門に殺されることとなる。

殺される累は夫に他の女ができたために殺されると誤解して死んでおり、夫に対する恨みはたいへん深い恐ろしいものとなる。夫（恋人）に殺されるということも、累物の大きな要素と考えてよいだろう。

⑤助の因果が累のうえに現れていること

助の母親が、器量が悪く躰も悪い連れ子の助を夫の先代与右衛門に言われて川へ投げ入れて殺してから一年後、二人の中に生まれた娘累は同じように躰の悪い子供だった。村人は「むかしの因果は手洗の縁をめぐると聞しが今の因果は針の先をめぐるぞや」と噂し合った。

与右衛門が妻の累を殺したのも、「心にあきはて」たからであり、「此女を守りて一生を送らん事」を本意なきことに思い、「異女をむかゑん」という身勝手な心からである。助の因果は、異父妹である累の器量や躰に現れているだけでなく、身勝手な思惑により身内に殺されるという運命までにも現れているのである。

累という名は、まさに因果を「かさね」る意味を思わせ、運命を予測したかのような名である。服部幸雄氏は『累曼荼羅』で「累の亡霊が、他のどんな亡霊とも違っている特性は、まさしくその名が示しているごとくに、親の死霊・怨念を『かさね』負うて生き、自身もまた死霊となって他者の肉体の上に『かさね』合っていくということである」と述べておられる。近親の因果がかさねられ、顕れているというモチーフは、累物の特徴として長く受け伝えられているのである。

累物が伊達騒動と結びついてからは、傾城高尾が姉、累が妹という設定がとられる。

『伊達競阿国戯場』の場合、高尾は頼兼公のお抱えの相撲取り、絹川谷蔵（のち与右衛門と名乗る）に忠義のために殺される。ところが高尾の妹、累がそれと知りつつ谷蔵に恋し、夫婦となったため、姉の恨みによって美貌が醜くなり、足も悪くなる。この部分などは助の因果によって醜く生まれたという『死霊解脱物語聞書』の話をうまく翻案し、血が繋がる兄弟の因果噺という原話の性格をうまく生かしているといえる。

累の話が単に、醜い女が夫に殺され、その死霊が継子に取り憑いたというだけのことならば、ここまで人々の脳裏に残りはしないだろう。累出生以前に殺された助の因果を受けた因縁譚であり、仏教の因果をそのまま表したような話であったからこそ、世の人々は震駭し、累の話は有名になったものであろう。

『花色紙襲詞』のかしはは、何かの因縁因果によって醜くなったのではない。偶然の生まれつきによる醜貌である。『花色紙襲詞』にはこの⑤は当てはまらないようである。累物がまだ完全に類型化していない時期だけに、このような作品が生まれたと考えられる。それだけに貴重な作例と考えてよいのではないかと思う。

⑥祐天上人の奇特

『花色紙襲詞』に登場する万水和尚はさしずめ祐天上人ということになるが、累物では最後は浄土宗の僧侶の念仏、または祐天上人の名号の奇特によって救われるというのが基本形である。『死霊解脱物語聞書』では、祐天上人によって累ならびに助の死霊は得脱することを得た。『伊達競阿国戯場』では祐天上人の名号の奇特で執着を見せる累の切首から死霊が成仏する有様が描かれている。『累辞絹川堤』では、娘きくのところへ現れたかさねの亡霊に対し、与右衛門が祐天上人の名号を取り出して念仏するとかさねが消える場面がある。『法懸松成田利剣』では、八助妹おりえに取り憑いた累の死霊を、そこに来合わせた祐念が祈祷する場面がある。また、敵に斬り付けられた与吉とおさえは、懐に持っていた祐念の名号の徳により蘇生する。

また、身売り系の戯曲で、天保九年（一八三八）に初演された『伊達競全盛曽我』(12)では、累に斬り付けられた足利頼兼の御台所、園生の前は傷もなく、代わりに懐に入れていた祐天上人の名号がズタズタに切れている(13)という奇瑞が起こる。

関山和夫氏(14)は『死霊解脱物語聞書』を「明らかに浄土宗の説教譚である」とされる。そして文芸に広く取り入れられるようになっても「累の因果物語は、因果と輪廻を説く説教の譬喩因縁談として江戸の民衆の間に広く深く浸透していた」とされ、この話における祐天上人による済度の重要性を強調される。累物において浄土宗の僧侶による救済、もしくは祐天名号による奇特は意義深いものなのである。

『花色紙襲詞』は以上考察した通り、累物の作品とみなしてよいと思う。題名の中にある「襲」の文字も音が「かさね」であり、累に通じることを示していると思われる。ヒロインの醜さが因果によるものと、特に設定してないところなどはまだ累物として未成熟な点であるが、相撲取りが活躍するところなどは、のちの『伊達競阿国戯場』に影響も与えたと考えられ、累物の歴史の中でも意義深い作品だと考えられる。

（1）『浮世草子の研究』（長谷川強氏、桜楓社、昭和四十四年）
（2）『累狂言の趣向の変遷―「伊達競阿国戯場」以前―』（東晴美氏、早大大学院『文学研究科紀要』別冊第二十集、平成五年）
（3）「さかさまの幽霊―悋気事・怨霊事・軽業事の演技とその背景―」（服部幸雄、『文学』昭和六十二年4月、その後『さかさまの幽霊』平凡社、平成元年に所収）
（4）大洲市立図書館矢野玄道文庫本。『変化論―歌舞伎の精神史』（服部幸雄、平凡社、昭和五十年）
（5）『法懸松成田利剣』（鶴屋南北、『鶴屋南北全集』九、浦山政雄編、三一書房、一九七四年）
（6）「累曼荼羅」（『変化論―歌舞伎の精神史』、平凡社、昭和五十年）
（7）『伊達競阿国戯場』（『日本戯曲全集』十六、春陽堂、昭和四年）
（8）『累辞絹川堤』（福亭三笑作、勝川春亭画、国会図書館蔵）
（9）「鏡と変身の演出」（早川雅水、『芸文研究』二十七号）
（10）「怨念の展開―累から岩へ」（富田鉄之助、『芸能』昭和五十年十一月）
（11）「鶴屋南北の累狂言研究」（高野匡子、『駒沢短大国文』昭和五十八年3月）
（12）『伊達競全盛曽我』（『世話狂言傑作集』六、春陽堂、大正十四年）
（13）切られた本人の身が無事で、身に付けていた名号が切れているという話は、有名な「剣難七太刀の名号」の話が元と思われる。『祐天大僧正利益記』に載る話だが、江戸時代は有名だった。本多中務侯の藩中の侍に仕える僕、門兵衛は過失を咎められて打ち首と決まった。ところが切れども突けども門兵衛を斬ることができず、門兵衛は無傷だった。検死役の役人が怪しんで信仰する神仏はあるかと問うと、祐天上人の名号を肌身離さず持ち、念仏していると答えた。その名号を開き見たところ、七カ所の切り傷があった。門兵衛は助命されて侍に取り立てられたという話である。
（14）「『死霊解脱物語聞書』の価値」（関山和夫、『庶民仏教文化論―民衆教化の諸相』、法蔵館、平成元年）